

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
「笑顔あふれる元氣な子」	やってみよう やってみよう ～夢中になって遊ぶ～	やってみよう、やってみようと思える環境と機会が用意されている	子どもの興味、関心を言葉だけでなく、動き、しぐさ、表情などから捉え、“やってみよう”ことができるよう環境をつくることができた。また、子どもと一緒に遊びを“おもしろがる”ことで、子どもたちの“やってみよう”気持ちが強まり“やってみよう”と動き出す子が増えていった。更なる遊びの変化を期待して、園庭環境を変化させ、もっと遊びが楽しくなるよう工夫していく取り組みを継続していきたい。	A	A	・待つことは難しいかもしれないが、大事にしてみたい。 ・黙ってしまう子も自己表現の一つとして捉えていくと良いのではないかと。 ・指標に「一緒に」という言葉が入っていたことで、ハードルが上がり評価がBになってしまったのではないかと。	子どもの発達を捉え、どこまで見守り、どのように声をかけると子どもたちが自分の力で考え動き出せるのか、子どもの育ちと保育者のかかわりについて話し合う時間を作っていききたい。子どもが試行錯誤し、もっとやってみよう、もっとやってみようと思えるように、今年度以上に園庭環境、教材の工夫をしていく。
		自分の思いや考え、感じたことを仕草や言葉で表現している	安心して遊び、生活できるかかわりをしてきたことで、保育者との信頼関係を築くことができ、それぞれの学年で、子どもたちは自分の思いを安心して表現できるようになっている。しかし、まだその場になると黙ってしまう子もいるため、個や状況に応じて、待ったり、言葉を補ったり、表情から読み取ったりと話し出せるきっかけを作っていききたい。	A	A		
		友達と一緒に試行錯誤できる関りが考えられた保育が展開されている	子どもの気づきや発見の喜びを大切にかかわってきたことで、子どもたちは自分で考えたり、やってみたりする機会を作れたと思うが、試行錯誤を繰り返し、工夫していけるようなかかわりや取り組みは十分ではなかったと感じる。どんな力をつけたいか子どもも理解した上で、子どもたちにとってどうやっていくか、共有を強化していきたい。	B	A		

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	学年目標を基に、発達の連続性を考慮した保育が展開されている	子どもたちに経験させたい遊び、発達に合った遊び環境、玩具、教材について考えながら保育していったことで、学年目標に近づく姿や成長が見られるようになった。しかしまだ無意識のうちに危ないからやめさせようとしたり、子どもが困らないように手助けしてしまったりすることがある。発達のおさえをもっとしっかり行う必要があると感じる。	B	B	・春に比べて、子どもたちも先生たちも笑顔で楽しそうにしている姿が印象的でした。 ・小さい子から大きい子がいる中で、異年齢でかかわりながらよく遊ぶ姿が見られた。 ・先生達が研修などでたくさん学びを得ていることが分かった。保護者にも発信していくと良いのではないかと。 ・試行錯誤できる環境が整えられていた。 ・一人で頑張ってもできることは限られてしまう。チーム力を活かすことで組織はもっと強くなると思う。コミュニケーションを大事に、チーム力をさらにあげていくと良い。	子どもの発達のおさえ、保育について語り合う時間を作る。(エピソードを語る中で、かかわりについて振り返る。月案検討の時間を作る等) 個々の発達に何が必要でどんな力をつけたいのかを理解し、一人ひとりに合った寄り添い方を工夫していく。 予想される遊びや、体験の中でどのような力がつくことが予想されるのか見通しを持ち、月案や週案の中で、必要な環境や援助を具体的に考え記入していく。 職員も実際の体験がない為、まだ心の底からの備えという意識まで到達していない。写真や映像を通して地震の怖さを職員間で共有し、避難後の組織運営などについても考えていきたい。
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園生活のスタートである登園の時間は玄関で親からなかなか離れられない子が多かった。8月に門での送迎にしたことで、子どもたちは、自分で気持ちを切り替えることができるようになった。子どもの自立を促す働きかけや家庭との丁寧なやり取り、職員間の伝達をしっかりと行っていったことで、子どもたちは安心して園生活を送ることができている。	A	A		
		(3)環境を通して行う教育及び保育	「もっと遊びが面白くなるには？」と遊びの発展を考え汎用性のあるもの、やりとりが面白くなるもの、など環境を工夫したことで、子どもたちは廃材遊びやごっこ遊びを発展させながら継続していくことができた。しかし、まだ試行錯誤を繰り返し、工夫していきたくするような環境が十分ではない。	B	B		
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な災害を想定した訓練を行い、身を守るための行動や命の大切さを伝えている	減災の意識が高まり、何を見直すべきか、何を子どもたちに伝えたり、考えさせたりすべきかなど、”訓練のための訓練”にならないよう、訓練の意味合いを再確認し、企画を立てることができた。また”ユレタ”や地震車体験を通じてリアルな揺れの怖さを知ることもでき、カエルのポーズで地震の揺れに備える理由を体で体験することができた。	A	A	季節によっておさえたい保健指導を月案、週案の中で具体的に明記し、クラス間で意識したり家庭にも伝え、連携したりしていく。	
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	食育活動を通して、健康に関心を持ったり、手洗いや鼻をかむ等の習慣がつくよう日々健康指導をしている	茶摘み、レモン、さつまいもなどの収穫体験を友達、保護者、保育者、地域の方と共有したことで経験を語り合ったり、体験をその後の遊びにつなげたりすることができた。給食室の職員がクッキングや行事食などで保育に積極的にかかわったり、給食室の様子をスライドショーで見せたりしてくれたことで、給食室職員への親しみが増している。手洗い、鼻をかむことが十分身につけていないため、指導のあり方を見直していきたい。	B	B		
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	発達にあった支援方法を職員間で共有し、自分の力でできることが、増えていける援助を行う	特別支援コーディネーターを中心にサポートプラン作成、保護者面談、応用行動分析の園内研修などを行うことで、個々の支援を明確にすることができた。トーマスの会を月1回行うことで支援児の成長を共有することができた。しかし、会の目的があいまいだった為に保育者によって捉え方や考え方にばらつきが生じてしまった。目的を明確にすることで、会がより子どもたちにとって効果的なものとなるようにしていきたい。	B	B		
5 組織運営	(1)組織体制の充実	園務分掌担当者を中心に見通しを持った企画と連携を意識した協力体制ができている	分掌担当リーダーを中心に、計画的に見通しを持ち、声をかけ合いながら進めることができた。昨年度の課題や、やってみようと思っていたことを実践に移すリーダーもおり、今までと違う事にも挑戦してみようという組織の意識が高まった。	A	A	若手の人材育成を意識し、個々の経験に合わせ、“0から自分で行動を起こしていく力”が身につくよう若手職員に働きかけていきたい。	
6 研修	(1)研修体制の充実	「やってみよう やってみよう」という気持ちで、夢中になって遊ぶ姿を目指し、「面白そう」「楽しそう」と思える環境づくりを学び合う	園内研修の充実を目指し、研修主任が研修部に声をかけ、課題や重点、話し合いのもち方、時間の配分、ワークシートの作成など事前に打ち合わせと準備をしっかりと行い、今年度のテーマに向かって研修を進めることができた。公開保育での学びやまとめで“研修だより”として発行したり、参加できなかった職員への周知をしたりすることで、成果や課題を共有することができた。園内研修とは別に、学年で必要と思われる研修を行う職員もおり、職員の声かけや環境づくりに変化が見られた。	A	A	職員の気づきや明日からやってみようという意欲をもっと促すために、次年度に向けての研修体制作りをしていく。	
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	園内外の定期的な安全点検の実施及び子ども達が選んで遊びだせる環境が用意されている	ヒヤリハットの事例を取り上げ安全対策について皆で話し合う研修を行った。話し合うことで、多面的に捉えることができた。必要な配慮についての理解が深まった。パート職員も含め、気がついたならそのままにしないという意識が高まり、破損した玩具や落ちている物など、気がついたことは声に出すという職員が増えた。園庭の選んで遊べる保育環境については、環境の再構成や整理整頓が十分でなかった。	B	B	学年の興味に合わせた環境や教材の準備をしても他学年と混在してしまい、その都度の整理整頓が難しいという課題がある。各学年で用意した教材や環境に関して全体に周知したり、協力してもらいたいことを共有できたりするシステムを考えたい。	
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	職員から進んで挨拶をする。お便りやドキュメンテーション、ホームページ等で、園での取り組みや子どもの姿を伝え成長を共有している	送迎時のトラブル、駐車場での安全面についてなど、保護者から園への訴えがあった時は園だよりで注意喚起を行い、子育てに関する悩み事も随時面談を行った。必要に応じて保護者の同行受診を行うことで情報を共有し、保護者の不安を取り除くことができた。各クラスでは、コドモンの配信で園の様子を伝えるなど子どもの成長を共有することができた。	A	A	次年度も、就学支援やケア児の対応などで担当が積極的に連携や調整を行うことが多くなると思うが、職員ひとり一人が責任をもちつつ一人で悩まず、皆で考え進めていきたい。	
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣の園や小学校の公開保育や授業参観に参加して、情報共有や交流の機会を設けている	近隣の園の公開保育に参加し、学びや情報を得ることができた。また、服織小学校の公開授業、支援学級の参観、就学支援の為に研修会開催など積極的に小学校を開放し、参加の案内をいただいたことで、小学校の様子を知ることができ、つながりを感じることができた。就学に向けて服織中央こども園との交流ができているので、次年度は、園から小学校へのアプローチとなる行動を起こしていきたい。	B	B	公開保育以外の日でも、気軽に小学校の先生に園の様子を見てもらえるようにしたり、小学校に行かせてもらったりする中で子どもたちの姿を少しでも語れる機会を作っていきたい。	
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	園庭開放やおしゃべりサロン等施設の利用を提供していく。また地域の方と園では出来ない経験を通して交流している	園庭開放、おしゃべりサロンを通して、地域に開かれた園としての役割を果たすことができた。新たな地域資源として、焼き芋用の薪を地域の材木店からいただいたり、散歩先の老人施設の方とお話ししたりと、人との温かいつながりを築くことができた。今後も地域資源を生かした園運営に取り組んでいきたい。	A	A	保育者が地域とつながる橋渡しをしていくが、かかわりの主体は子どもたちであることを再認識し、子どもたちと地域がつながるような保育展開を工夫していきたい。	